

## 木村先生と日本語日本文学科

土 井 洋 一

木村正中教授は平成八年三月をもって、学習院大学を定年によりご退職になった。

学科が木村先生を最初にお迎えしたのは、昭和四九年度で非常勤講師としてであった。当時の国文学科には、松尾・吉岡の両教授がいらして、平安朝文学を担当していたが、日記文学や紀行文学にまでは手が回りかねていた。どなたか適任の方はという段になって、木村先生をおいて他にない、という結論に達するに時間は要しなかった。平安朝文学、就中日記文学に関する研究で、先生は既に第一人者の地位を占めていらしたのである。

かくして始まった先生の授業には受講の希望者が殺到し、卒業論文の実質的な指導を仰ぐ学生も後を絶たなかった。五一・五四年度と非常勤をお勤めいただいたのち、五五年度に松尾教授の後任としてお迎えする事になったのは、学科として当然の帰結であった。

木村先生は、研究・教育面だけではなく、学校運営の面でも卓越した手腕を發揮なさっていたから、前任校に多大な迷惑をかける結果になってしまった。割愛していただけたのは、偏に先生のお人柄によるとはいえ、先生ご自身、狭間にあつて対応に苦慮なさつたであろうことは想像に難くない。その先生が私どものお誘いに応じてくださったについては、学問を通じての松尾教授との信頼関係があつたのに加えて、旧制高校以来の大野教授との交友があつたのである。後者については、先生ご自身お述べになつていたので参照されたい(本誌三四号)。

木村先生は、就任に当たつての所感で、『蜻蛉日記』との出会いにお触れになつたうえで、心に残るリルケのことは

「人生は運命よりも偉大である」に言寄せ、決意と展望をお示しになった(学会会報九号)。

爾來一六年、教室で直接聲咳に接しえた学生に限っても、その数は二千人に近い。卒業論文の指導も毎年二〇名前後に及んだ。学年末近く、その成果を読み評価する作業は、教師にとつての楽しみの一つであると同時に相当な重労働でもある。その読み進め方には、ノートを用意し要点を克明に記すのと、ノートはメモ程度に留め、問題点を論文に直接記入するのとの二つのタイプがある。木村先生は、専ら前者であつた。成果は今一つであり一見して底の割れるような論文であつても読みは慎重を極め、手抜きなど無縁な性格であるから、口述試験間近になつても論文が先生の手元に滞り、審査の相方が音を上げることも屢であつた。口述試験もまた、時として演習の場と化した。意見や評価を一方的に押しつけるのではなく、理に適つた意見を学生から引き出すべく、辛抱強く誘い水を与え続けるのである。かくて、学生は改めて学問の真髓に触れ、「人生を偉大ならしめる」一時を先生と共有する幸せを実感したのである。

木村先生には、平成元年度からの七年間、学科主任をお願いしたのであつたが、学科にとつてもこの前後の時期は、一つの大きな転換期であつた。即ち、昭和六二年度に恒常的定員増を伴う日本語教育系を新設し、平成三年度には学科の名称を現行の日本語日本文学科に改めた。前者のお膳立ては大野教授を中心になされたけれども、対外的な折衝には木村先生を煩わすことが多かつた。そんな時先生は嫌な顔一つされず、的確且つ迅速にことを処理なさるのであつた。木村先生の学問は在職中益々その領域を拡大し、今や木村学とも称すべき体系の確立も成された感がある。門外漢が徒に蕪辞を連ねる愚は避けるけれども、集大成とも見なせる集成本『土佐日記』や全集本『蜻蛉日記』を通して、多くの学生に古典文学に親しむ端緒を与えてくださった一つを取り上げるだけでも、その功績は計り知れないものがある。学習院は安倍賞(学術賞)を授与し、ささやかながらその労に報いたのであつた。

研修旅行先の飛鳥では、自転車で学生の先頭に立ち、洛中洛外の文学遺跡では、隈なく周遊して倦むことを知らない先生の意欲は、未だ健在である。ご出生が僅か一日遅れていたら、もう一年お教えいただけるところであつた。幸い、研究会等で屢ご出校なさっている。変わらぬご指導と一層のご自愛を祈念する次第である。(平成九年一月一〇日)